研究発表 1

ターミナルケア・医療との連携

その他（施設系）

その他（居宅系）

1-1	演題	ぴかぴか一年生看取り奮闘記
	副題	～困難事例から学ぶ、これからのかわいの家～

看取りケア		法人名	社会福祉法人 奉優会
困難事例		施設名	特別養護老人ホームかわいの家

発表者名（職種）	小澤　考平 介護支援専門員	都道府県	神奈川県
共同発表者	三木　貴子	住所	神奈川県横浜市旭区川井宿町 69-1
共同発表者		TEL	045-954-4500
共同発表者		FAX	045-954-4499
共同発表者		メールアドレス	kawainoie@foryou.or.jp
共同発表者		URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	緑豊かな閑静な住宅街の中に平成 22 年 4 月に開所しました。 「あたりまえの生活の実現」という理念のもと、今までの暮らしを継続していただきたいという思いから、多職種連携と個別ケアを推進しております。

研究の目的、PR ポイント

高齢者人口の増加から、慢性疾患を抱えるご高齢の方が、コロナ禍も重なり、医療機関での受入が困難になるケースも多く、より高齢者施設での看取り支援が重要視されている。
そんな中､かわいの家では「コロナ禍での看取り支援」のあり方、ご入居者様・ご家族様・職員を取り巻く環境にスポットをあて、今後のケアに活かしていく為、事例研究としてまとめている。

取り組んだ課題

① 新型コロナウィルス感染症が猛威を振るっている中での看取り支援のあり方
② ご家族様が望まれる看取り支援を考える
③ 新人職員が不安なく、安心したケアを行えるよう、多職種連携での看取り支援

具体的な取り組み

コロナ禍の影響が甚大な中、施設内での看取り支援も過去に例をみないペースでご逝去が続いており、コロナ禍での看取りのあり方、ご家族様の真意を紐解き、満足のいく支援とは何かについて考える
① コロナ禍での看取り支援の取り組み
② ご家族の望まれていた看取り支援とは
③ 不安なく寄り添える看取り支援とは
1 つ目は、コロナ禍での看取り支援を実践し、以前とは異なる対応方法から多くの学びを得る
2 つ目は、ご家族を交えたカンファレンスを高頻度に実施するも、最期まで施設での看取りもしくは医療機関への受診を検討され続けており、ご本人、ご家族の立場に立った支援のあり方を施設全体で検討し取組む
3 つ目は、新人ユニット職員が看取り支援について未熟であり、ご本人、ご家族との向き合い方について学ぶ

活動の成果と評価

① 最期を迎える数日間は、ご本人様、ご家族様はご一緒に過ごされ、ご家族様とともにエンゼルケアを行うことができた。コロナ禍でもできる看取り支援を実践することができた
② 最期まで施設での看取りがよいか、医療機関への受診がよいのかで悩まれていたが､多くのカンファレンスを開催することで、最終的には施設での看取りを行うことができた
③ ご入居者様の最期を迎える支援を OJT、OFF-JT から学び、抱えていた不安を解消することができた

今後の課題

① 今年度、コロナ禍が明ける年になることから、看取り支援だけではなく、滞ってしまっていた各種支援の再開が急務である
② ご家族様の真意を入居前から常に汲み取り、最善の支援を提供できるようにしていく
③ 対面研修が滞ってしまっていたことから、今年度は実践的な内部研修を積極的に行い、不安の解消だけではなく､知識技術の向上を図り､ご入居者様・ご家族様・職員の満足度をより高めていきたい

1-2	演題	家族、相談員として経験し、学んだ看取り
	副題	～施設、家族、在宅医との連携～

		法人名	社会福祉法人 藤嶺会
		施設名	特別養護老人ホーム　弥生苑

発表者名（職種）	吹揚　佳子 相談員
共同発表者	佐久間　篤
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市旭区上川井町 1241-1
TEL	045-922-5141
FAX	045-921-5041
メールアドレス	otoiawase@toureikai.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	平成９年５月開設　従来型 本入所：81 名　　短期入所：９名 平均要介護度：4.3（令和５年４月現在） 法人理念「やさしさ、思いやり、ふれあいを大切に、高齢者の豊かな生活を築いていくことを目標にします。」

研究の目的、PR ポイント

本格的に看取り介護に取り組むようになり 23 年、近年では年間 25 ～ 30 名のお客様が当施設で最期を迎えられている。
当苑での平均在所期間は約３年ですが、医療対応も重度化され、医療に関する知識等、ニーズも拡大されている。
そのような中、ガン末期の母の看取りを相談員として働きながら経験し、今だから理解できるたくさんの学びがありました。

取り組んだ課題

1. 在宅での生活を送るための介護者がいないガン末期の母
2. 余命３ヶ月の母を支える一般事務の長女 (家庭あり)、特養職員の私 (独身)
3. ショートステイとしての看取り介護
4. 生活相談員であり、家族である私
5. これまでの生活スタイルと考えてもいなかった特養での生活のギャップ

具体的な取り組み

1. 治療、生活スタイル、パートナー…、母の本心と、終末としての生活の場の選択肢と決断
2. 短期入所利用の中での事業所探し (主治医、訪問看護)
3. 心と身体、喜びの瞬間づくり
4. 居宅と施設のチーム連携
5. 新たな介護、看護技術の習得

活動の成果と評価

1. 在宅支援者と協働できたことで、本人に負担とならない介護を実践することができた
2. もう一度、笑顔や気力を生むことができた
3. チーム連携の目的がはっきり見えた

今後の課題

1. 諦めた終末の場ではなく、その人らしいライフスタイルの終末期
2. 特養待機者としてのロングショートではなく、終末期のためのミドルステイ (1 ～ 3 か月程度)
3. 最期の時を待つ看取り介護ではなく、ご家族とそれぞれの職種が協働して実践するターミナルケア

1-3	演題	高齢者施設の緩和ケアの現状と課題
	副題	～在宅医対象の全国アンケート調査～

緩和ケア	
終末期医療	

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	介護老人福祉施設　若竹苑

発表者名（職種）	竹田　雄馬 その他
共同発表者	阿部　晃子
共同発表者	里見　絵理子
共同発表者	沖田　将人
共同発表者	足立　大樹

都道府県	神奈川県
住所	横浜市神奈川区羽沢町 550-1
TEL	045-381-3232
FAX	045-373-7472
メールアドレス	ytd0714@yahoo.co.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	当法人では、横浜市を中心にして様々な医療福祉サービスを展開している。高齢者施設は特養・老健を中心に運営を行っている。数年前より医療介護連携について横浜市立大学附属病院と様々な研修や取り組みを行ってきた。

研究の目的、PR ポイント

本邦では高齢者施設での死亡者数少なく推移していて、施設での看取り率も低い。高齢者施設の中でも、特別養護老人ホームと有料老人ホームを中心に看取りが行われている。先行研究は、老衰や認知症に焦点を当てた介護職や看護職を対象とした調査が多く、実際にどのような緩和ケアや医療が行われているかは明らかではない。本研究では医師を対象とした全国アンケート調査を行い、高齢者施設での緩和ケアの現状と課題を明らかにする。

取り組んだ課題

本研究では、在宅医が高齢者施設の緩和ケアの現状と課題をどのように認識しているかを調査した。また、緩和ケアを必要とする病気や病態、薬剤・処置に対してどこまで対応できるかをアンケートした。高齢者施設で緩和ケアを行ううえで生じている障壁と緩和ケアの普及のために必要なことについても先行研究をもとに項目を抽出して聞き取りを行った。

具体的な取り組み

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団から助成を受け、国立がん研究センター病院の倫理審査委員会の承認を得た。特別養護老人ホームまたは有料老人ホームを担当している全国の在宅医を対象にアンケート調査を実施した。202 施設・197 名の医師から回答を得て解析を行った。高齢者施設で「緩和ケアをもっと積極的に行うべき」だと 88% の在宅医が感じていた。老衰、認知症は対応可能な施設が多いが、他の疾患は施設により対応に違いがあった。内服治療は対応可能だが、複雑な処置が必要な病態は対応できない施設が多かった。緩和ケアの障壁と普及に必要なこととして、施設の運営方針の変更、看護体制の改善、医療保険での報酬の改善が挙げられた。

活動の成果と評価

本研究は、第 28 回緩和医療学会で優秀演題に選出され口演発表を行う予定となっている。また、今年度中に論文化を予定する。また、国立がん研究センター中央病院・横浜市立大学附属病院と連携して高齢者施設の職員を対象に継続的に研修会を開催することを予定している。

今後の課題

本研究では、高齢者施設で対応できるケアは限られていて、施設ごとに大きく異なることが判明した。特に、施設運営の方針・看護体制・医療保険の診療報酬については多くの在宅医が問題点として指摘した。高齢者施設が終の住処として機能するためには、どの施設でも様々な疾患や病態を受け入れ、処置を行える医療体制を整えることが必要である本研究は、特別養護老人ホームと有料老人ホームに対象を絞ったため他の高齢者施設の状況は不明である。また、在宅医療支援診療所の医師を対象としたため、その他の医療機関の場合は対応できる範囲が更に限定される可能性がある。今後は、診療を行う医療機関や高齢者施設の類型に合わせた検討が必要である。

参考資料など

- Jorid K. BMC Health Service Reserch 2020.
- Sarah H C. NEJM 2019.
- 厚生労働省 . 厚生統計要覧 2022.
- Elisabeth H. BMJ Open 2021.
- Elisabeth H. BMC Public Health 2019.
- 井上 由起子 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業 . 2020.
- 澤田有希子 . Human Welfare 2019 ③大分県看護協会 . 看護職能Ⅱ委員会 2019.
- 池上 直己 . 日本医療・病院管理学会誌 2013.
- 大河原啓文 . Palliat Care Res 2016.

1-4	演題	病院での難事例に特養は何をしたのか
	副題	～難治性褥瘡治癒好事例（多剤服用の視点）～

多剤服用		法人名	社会福祉法人 愛生福祉会
ケア会議		施設名	特別養護老人ホーム　田谷の里

発表者名（職種）	笹本　雄大 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者	佐田　農	住所	横浜市栄区田谷町 1364 番地 2
共同発表者	菅野　陽平	TEL	045-852-0012
共同発表者	近藤　浩平	FAX	045-827-3866
共同発表者	坂本　匠	メールアドレス	tayanosato@aiseifukusikai.jp
		URL	https://www.aiseifukusikai.jp/facility/tayanosato/

今回の発表施設またはサービスの概要	ご自宅にいる時のように、その人らしくのびのびとした日常をお送りいただけるよう、お手伝いをさせて いただいています。四季折々のお料理や、催し物などを通じて、安らぎとぬくもりのあふれる毎日を お過ごしいただけます。

研究の目的、PR ポイント

治療が困難であった両踵に発生した褥瘡に対して、特養ではどのようにアプローチすればよいのか。
両踵に発生した褥瘡が、治療が必要ない状態にまで回復しました。入居時の DESIGN 評価点数 12 点（D2-e0s6i0g6n0p0）が治癒した。

取り組んだ課題

ポリファーマシー（多剤服用）の観点から見直し改善に向けて検討する→リスペリドン（2022 年 4 月頃より服用、夕食後に 0.5㎎服用）と下剤（アミティーザカプセル 24μg　グーフィス錠 5㎎）

具体的な取り組み

褥瘡の治癒に有効な方法を考察すべく、服薬状況から見直す。（不要な服薬を洗い出し除薬）
栄養面において、食事が全量食べられて栄養を摂ってもらう。
毎日足浴で清潔に保ち、医務処置にて治療する。

活動の成果と評価

服薬していた抗精神薬（リスペリドン）を除薬し、覚醒状態が良好、自力での食事や、物を取ろうと手や体を動かす、ベッド上での寝返りなど自発的な活動が増え、活気が良くなる。
食事摂取状況が向上し栄養が取れ、体動が増えて両踵の除圧につながり、結果として褥瘡の完治につながった。

今後の課題

抗精神薬（リスペリドン）を除薬し､覚醒状態が良好、活気が良くなった様子で、体動（腕をこする等）が増えたことにより四肢や体幹の傷や痣（内出血や表皮剥離）が増え、転落などの事故が起こるようになった。
この問題行動に対してどう対処していくか。

参考資料など

改定 DESIGN-R®2020 コンセンサス・ドキュメント

1-5	演題	あなたなら誰とどこで最期を迎えたいですか
	副題	

		法人名	社会福祉法人 泉正会
		施設名	スプリングガーデン瀬谷

発表者名（職種）	関　桃恵 介護職員
共同発表者	岸　吉勝
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市瀬谷区下瀬谷 1-27-25
TEL	045-304-0241
FAX	045-304-0242
メールアドレス	mimura@senshoukai.com
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	平成１７年４月に開設した本入所８５名、ショートステイ５名のユニット型特別養護老人ホームです。「その人らしく今を生きる」をテーマに個別ケアに取り組んでいます。

研究の目的、PR ポイント
施設での看取りケアの需要が高まる中、私達介護職員に求められることを明確にする。

取り組んだ課題
実際に施設での看取りケアを振り返り、課題のプロセスと成果について取り組んだ。

具体的な取り組み
利用者の看取りケアで課題となった食事介助に関して、チームアプローチを行った。家族と積極的に関わり意見を伺った。

活動の成果と評価
家族との意見のすれ違いから解決のプロセスを踏まえて、説明と同意を得るだけではなく、家族の不安や葛藤を理解し寄り添うケアが必要であることが分かった。

今後の課題
状態の変化に伴って、本人・家族の考え方も変わっていく事を理解し、日々意向確認に努めていきたい。その為にも家族との積極的な交流や日々の様子を詳細に報告していく必要がある。

1-6	演題	特別養護老人ホームにおける看取りケア
	副題	～目指す看取りケアと改善すべき問題点～

看取りケア	
特養	

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	若竹苑

発表者名（職種）	本城谷　さや 介護職員
共同発表者	小池　蘭
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市神奈川区羽沢町 550-1
TEL	045-381-3232
FAX	045-373-7472
メールアドレス	izena_sin@wakatake.or.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	特別養護老人ホーム　通所介護　ショートステイ　居宅介護支援事業　地域包括支援センター

研究の目的、PR ポイント

- 看取りケア確認シートの活用が看取りケアに及ぼした影響とそこから見えるケアの課題
- 介護士における看取りケアの意識化とメンタルケア

取り組んだ課題

- 看取り介護実施計画書に沿った看取り期ケアの実施
- 看取りケア確認シートの活用にて看取りケアのカンファレンスの代用、介護職員のメンタルケア実施
- 看取りケア確認シートのフィードバックにて看取りケアの課題の追及

具体的な取り組み

期間：2022 年 7 月～ 2023 年 3 月
対象者：2 階フロア　7 名　3 階フロア　5 名
→本施設にて看取った利用者のうち、①看取り介護実施計画書を作成　②看取りケア終了後に看取りケア確認シートの実施　①、②の条件を満たした計 12 名にて考察
具体的方法：

① 医師，看護師，家族により看取り一か月ケアプラン対応となった利用者に対して 7 部署の担当者が「看取り介護実施計画書」の作成
② 看取りケアの実施
③ ケアに関わった介護職員に対し「看取りケア確認シート」の記入
④ 結果のフィードバックを実施
　参加職員：若竹苑　入所フロア勤務介護職員
　部署間連携：ケアマネ、看護師、栄養士、歯科衛生士、機能訓練士

活動の成果と評価

看取りケア確認シートの使用により得られた効果

- 看取りケアの意識化による介入増加
- ご利用者の個人に寄り添った「その人らしさ」を重視したケアの実施
- 看取りを振り返ることにより、看取りケアを行った職員に対するメンタルケア

見られた課題

- グリーフケア不足
- 看取りケアの標準化
- 介護職員間での情報共有

活かすべき要点

- ご利用者の嗜好調査の実施→「その人らしさ」を深める
- ご家族との連携

自己評価

- 看取りケアの見直し
- ご利用者の嗜好調査・グリーフケアの実施

今後の課題

グリーフケアの実施　利用者の嗜好調査　看取りケアの標準化

参考資料など

島田千穂・伊東美緒・平山亮・高橋龍太郎（2015）「看取りケア経験の協働的内省が特別養護老人ホーム職員の認識に及ぼす影響」社会福祉学 56（1）　87 - 100.
坂下恵美子・西田佳世・岡村絹代（2013）「特別養護老人ホームの看取りに積極的に取り組む看護師・介護士の意識」南九州看護研究誌 11（1）　1-9.
島田千穂「看取りの振り返りを有効に実施するためのガイド　反照的習熟プログラムのすすめ」東京都健康医療センター研究所　福祉と生活ケア研究チーム　終末期ケアのあり方

1-7	演題	『苦しみ』と『やすらぎ』に向き合う
	副題	～「痛み」のサインから学んだ看取り介護～

下肢の壊死	
かりんとう	

法人名	社会福祉法人 母子育成会
施設名	特別養護老人ホームしゃんぐりら

発表者名（職種）	近藤　海璃 介護職員
共同発表者	吉澤　友彬
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	川崎市幸区東小倉 6-1
TEL	044-520-3860
FAX	044-520-3861
メールアドレス	s-guri@gf.netyou.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	特別養護老人ホーム　しゃんぐりら (平成 16 年 4 月開所)　別館 (平成 24 年 3 月開所)　多少室 184 床　ユニット型特養 4 ユニット 36 床　ショートステイ 10 床　川崎市内で一番大きな施設です。平成 24 年に看取り介護を開始しています。

研究の目的、PR ポイント

コロナ禍の看取り介護で、家族の面会時に「本人はかりんとうが好きだった」と情報が得られて、嗜好を知ることが出来た。
結果として、かりんとうを食べる事は出来なかった。どのような支援があれば、最期のときまで好きだった『かりんとうを食べる』ことができたのか、考えさせられる看取り介護であった。

取り組んだ課題

- 糖尿病を患っている利用者様で、食事は DM 食 1200 ～ 1400 kcal で提供していた。
  生活内では「好きな物を食べる」という嗜好に合わせた飲食、楽しみを持つことが難しい状態であった。
- 閉塞性(へいそくせい)動脈(どうみゃく)硬化症(こうかしょう)の進行による、両足趾(りょうそくし)壊死が拡大していき、疼痛緩和で鎮痛剤を内服しながら、壊死による感染予防のために清潔保持と処置を行ってきた。
- 日常生活のなかで、「壊死の処置」をする時間は、職員を叩く、抓るなどの抵抗感もあった。その苦痛に感じる時間は毎日続いていた。看取り介護が開始となって、苦痛を伴う時間を補えるための、生活の「楽しみ」を模索していくことが、今回の事例では課題であった。

具体的な取り組み

- 家族との面会を機に、本人が好まれていた飲食、趣味、人柄について家族から聞き取りを行うことが出来た。
- 「かりんとうなど甘い物が好きだった」という家族の話から、甘味料のゼリーやはちみつ、チョコソースを提供して、好きな物を口で味わうように、食の楽しみを支援していった。
- 嗜好品である「かりんとう」については、介護職で『食べられない物』という認識で提供することはなかった。

活動の成果と評価

壊死の処置中は「叩く」「抓る」「噛みつく」「叫ぶ」といった行為が、見られていた。この痛みを訴える行為こそが、本人の活力の現れでもあり、日に日に弱々しくなっていくこれらの行為が、死期が迫っていることを感じさせる瞬間でもあった。
本人が好んでいた「かりんとう」は、嚥下機能の低下から誤嚥を起こすリスクを考えて、「食べられない物」と認識してしまった。介護職の気付き、柔軟な発想から味わう、食感を楽しむための工夫が出来なかった。
今までの暮らしの中で『楽しんでいたこと』を最期のその時まで支援することが出来れば、よりその人らしい「いつかの日常」を感じて頂けたのではないだろうかと思っている。

今後の課題

① 情報共有と他職種協働（チームケア）
今回の事例のように、「かりんとう」を味わってもらえる工夫は、介護士だけでなく、看護師や相談員、栄養士と専門性を活かすことで、「食感を楽しむ」「味わう」「香りを感じる」など出来ることはあったと思う。
多職種というチームケアを活かして、最期のときを迎えるまで、気持ちが穏やかでいられる支援をしていきたい。
② 看取り介護を考える
終末期という言葉もあり、看取り介護ではその人の最期の時間を強く意識してしまう。しかし、本当に大事なのは「その人の今まで（日常）」であり、たとえ好きなものを健康上の理由で制限してきた人でも、最期は好きなもの、楽しみのある日常に戻ることができる。看取り介護とは 自分らしくいられる最後のチャンスなのだと思いました。

1-8	演題	いのちのバトンを繋ぐ
	副題	～見守りセンサーを活用した看取り委員の取組～

		法人名	社会福祉法人 ユーアイ二十一
		施設名	太陽の家横濱羽沢

発表者名（職種）	阿部　直樹 介護職員
共同発表者	小林　しのぶ
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市神奈川区 羽沢町 2-1
TEL	045-442-4907
FAX	045-442-4906
メールアドレス	jinzai_ikusei@ui21.or.jp
URL	https://www.ui21.or.jp

今回の発表施設またはサービスの概要	平成 30 年 4 月横浜市神奈川区で開設した本入居 110 名・短期 10 名の特別養護老人ホーム。『ご入居者一人ひとりの本来持っている想いや力を大切にした個別ケア』を実践。施設内は素足で過ごせるよう畳や絨毯を採用し和モダンを基調としています。

研究の目的、PR ポイント

開設時よりアームスを採用、力を入れているのが看取り介護である。アームスを活用する事で大きな成果が期待できる。臥床時の体調を把握、観察することができる。看取り時、変化する状況を的確に読み取る、最期の時を見送る心構えをすることができる。夜間帯は介護初心者にとって看取りは難易度の高いケアである。アームスを活用することで初心者でも経験者と同じように変化を認めることができ、有効かつ確実性に期待できる。「決してひとりでは旅立たせない」【命のバトンを繋ぐ】ツールとして役立てたいと考えます。

取り組んだ課題

看取りケアにアームスを取り入れることを課題に選んだ。看取りに対してユーアイ二十一の理念である『安心・温もり・満足』の精神を貫いていきたい。
『決して一人で旅立たせない』を看取りの基本であると考え、アームスを活用する。アームスのデータは看取り時刻々と変わる数値を直ぐに確認でき、必要な心拍・脈拍・呼吸数を把握できるデータを頼りに行動することができる。

具体的な取り組み

【看取り】について看取り委員会が中心となり、研修会を実施※決して一人では旅立たせない。※命のバトンを繋ぐ。一人ひとりが体験を学び取ってほしい研修の趣旨であった。研修後に提出された報告書を分析し、参加者の理解度及び反響などを分析していきアームスの活用方法を周知する。その活用法は、波形グラフを用いて心拍などの推移を考察する。看取り時には呼吸低下アラートなどで、変化を知らせる個人のデータの差異を見知る事により誰でも早期対応が図れる。

活動の成果と評価

全職員のアームスに対する理解が上がり、リーダーを中心にアームスのデータを基に看取りの対応が出来るようになった。特に不安だと感じる夜間帯の対応は、日中のデータと本人の状態を確認し、申し送りを行う事で不安は解消されたという声が多数あがっている。ご家族からも以前は巡視の際の状況変化と発見時の状況を職員の見解で説明し、その職員の感覚的な部分があったが、この取り組みを始めてからは【いつ】【どのように】【どうなった】かを根拠のあるデータを基にご家族に説明し、ご理解されるご家族が殆どである。呼吸や心拍数の変化をアラートで確認し、事前にご家族へ連絡出来ている事も増え、今回の取り組みのテーマである「決して一人では旅立たせない」を実現できている。

今後の課題

施設で「決して一人では旅立たせない」というテーマをより深く浸透させていくその為にアームスを活用する、根拠のあるデータで職員・家族への安心・温もり・満足を追求していく。アームスの活用をより浸透させていく為、マニュアル作成と操作や仕組についての研修を行い、職員のスキルアップを目指す。これらを実施していく事で今後、職員の経験値に関わらず、根拠ある説明をご家族にできるように取り組んでいく。

参考資料など

株式会社バイオシルバー
ａａｍｓ（アームス）

1-9	演題	褥瘡の予防や改善に効果のある取組み
	副題	

	法人名	社会福祉法人 セイワ
	施設名	介護老人福祉施設　鷲ヶ峯

発表者名（職種）	水口　ゆうじ 介護職員
共同発表者	上原　亜由美
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	川崎市宮前区菅生ヶ丘 13 番 1 号
TEL	044-978-2721
FAX	044-976-6470
メールアドレス	s-washigamine@soleil.ocn.ne.jp
URL	http://www.seiwa-washigamine.jp

今回の発表施設またはサービスの概要	当施設は川崎市宮前区に位置し、開設 23 年目、特養：72 床、平均介護度 4.3。短期 18 床、通所 30 名、地位包括支援、居宅介護を運営しています。2F・3F が入所施設、介護職員もフロア制で生活の支援をしています。

研究の目的、PR ポイント

ここ数年、施設として利用者の褥瘡ゼロを目標として掲げ取り組んできていたが、褥瘡の再発や新たな水泡形成、発赤の発生する利用者がおり褥瘡ゼロに至らず一進一退の状況が続いている。
3F フロアで再発する利用者が多く見られたため、褥瘡の改善及び予防について職員の褥瘡に対する意識の再確認を行い、その結果による具体的な改善や予防方法を構築、実践することにより褥瘡ゼロを目指す。

取り組んだ課題

現在 3F フロア本入所 38 人に対し、寝返りが出来ず褥瘡発生の高リスクの利用者が 23 名おり、褥瘡の発生人数も増えてきている。
介護職員が褥瘡の発生や予防と改善について意識し、フロア職員全体をチームとして情報共有し共同で褥瘡の改善と予防に取組む。
介護職員が褥瘡形成者、高リスク者を把握し統一したケアを行う為に、分かりやすく手間のかからない周知方法を模索し情報共有を図った。

具体的な取り組み

利用者の褥瘡ケアに関するアンケートを 3F フロア職員に実施し、褥瘡形成者、高リスク者の把握状況、褥瘡ケアについての各個人の考え等を収集した。
アンケートにより、褥瘡形成者、高リスク者に対する除圧やケアの方法について統一がされていないことが分かり、ケアの内容と周知方法について方策を検討した。

1. 体位交換表を作ってこまめな体位交換を行い実績がわかるようにした。
2. 利用者の居室の壁に注意点や除圧の仕方等について貼り紙をし実行した。
3. 看護職員を中心とした褥瘡ケア委員会（看護職員・介護職員・管理栄養士・相談員・ケアマネ・事業長もメンバー）を定期開催し、ケアの実施状況と褥瘡の状態の把握・管理を行う。
4. 臀部の褥瘡の改善が悪く車椅子を使用している利用者については離床時間が長くなり過ぎない様にし、臀部への負担を軽減する。
5. ポジショニングの再確認として、外部講師を招き研修を行う。
6. 褥瘡（発赤や水泡含む）発生後の経過観察を行う。

活動の成果と評価

1. 体位交換表を使用することで褥瘡ケアに対する職員の意識が改めて高まった。
2. ベッドサイドの壁に体位交換時の除圧方法や注意点を掲示したことにより、やり方を覚える手間が省けケアの統一に繋がった。
3. 栄養状態が改善したことで褥瘡の治癒が早まった。
4. 発赤や水泡、皮剥けといった褥瘡が再発してしまう利用者もあったが、適正な除圧やポジショニングにより、褥瘡のさらなる悪化を防ぐことが出来ている。
5. 職員も褥瘡が改善していく状態が目で見て分かり実感することで取り組む意欲が高まった。

利用者の褥瘡の改善や再発予防に一定の効果が得られていることで、フロア職員の褥瘡に対する意識が高まり、褥瘡の情報共有や改善、ケアの方法に関することなど積極的に意見交換をするようになっている。

今後の課題

未だ褥瘡ゼロの目標に向かっている過程であり、さらなる対策の検討と実践が必要である。情報のいち早い共有と対策の立案・実行が褥瘡の悪化を含めた予防対策の第一段階と考える。今回行った取り組みや研修をブラッシュアップし褥瘡ゼロを目指していきたい。
また、今回は施設の 3F フロアにおいて研究を行ったが、2F フロアにおいても導入を検討し、施設全体で褥瘡ゼロを目指していく。

1-10	演題	医療連携による看取りプロジェクトの軌跡
	副題	

看取り介護		法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
医療連携		施設名	介護老人福祉施設　わかたけ富岡

発表者名（職種）	鈴木　伸貴喜 介護支援専門員	都道府県	神奈川県
共同発表者		住所	横浜市金沢区富岡東 2-1-5
共同発表者		TEL	045-776-1230
共同発表者		FAX	045-776-1060
共同発表者		メールアドレス	wakataketomioka@wakatake.or.jp
共同発表者		URL	https://wakatake.net/category/facility/tomioka/

今回の発表施設またはサービスの概要	横浜市金沢区に 2002 年開所 144 床（本入所 134 床、ショートステイ 10 床）の従来型の特別養護老人ホーム。平均要介護度：3.8 「職員一丸となって人を幸せにします」の法人使命のもと、自分自身が利用したいサービスの実現に日々努めています。

研究の目的、PR ポイント

介護老人福祉施設における看取り体制の確立と看取りケアの質の向上を目的とする

取り組んだ課題

開所から 21 年目を迎える当施設では、表題の取り組みの開始以前､嘱託医による診察は週 1 回であり夜間･休日対応ができないことが多く、本人・家族が施設での看取りを望まれていたとしても心肺停止となった際、救急搬送せざるを得ず死亡退所対応となるケースが少なくなかった。
実際にご家族から頂いた言葉、「ここで暮らせたことは感謝しています。だけどお願いがあります。最期に心臓マッサージをしながら救急車を呼ぶのはやめてほしい。これからの人のためにもお願いします」
本人・家族の希望を叶える為、また施設での看取りという社会的なニーズに応える為、平成 31 年より法人所属医と連携し、「看取りプロジェクト」を発足。体制づくりや実際の看取りケアの実践について本人・家族に寄り添って進めてきた軌跡を報告する。

具体的な取り組み

◆ 3つの連携を意識して取り組みを進めた

◇医師との連携
嘱託医に加えて、法人所属医・地域の病院勤務医と連携して施設に駆けつける体制を整えた。嘱託医との看取りのカンファレンス記録を医師同士で共有することで、呼吸停止時に連携医師が死亡確認できる体制を構築した。

◇看護師と介護職員の連携による看取りケアの実践
- 最期までお食事を楽しむ（味わう）工夫
- 思い出の写真を飾る、好きな音楽や香りを楽しみ穏やかに過ごせる工夫
- 苦痛の少ないポジショニングと清潔保持
- コロナ禍での面会対応
- エンゼルケアとお見送り

看護師とともに看取りケアの振り返りを行い、今後のケアにつなげていった。

◇本人・家族との連携
基本的に家族との応対は介護支援専門員が行うこととし、入所時のリビングウィルを活用した説明、食事量の低下や体調の変化に応じた説明、看取りカンファレンスに向けた段階的な説明を意識して行った。コロナ禍においても、面会の機会を活用して状態の説明を行った。また説明の際、何度も揺れ動く家族の気持ちを傾聴し、しっかりと寄り添う支援を心掛けた。

活動の成果と評価

○ 取組実施してから当施設の過去 5 年間の退所者数に対する看取り実施率
H30 年度：29%（35 名中 10 名）
R1 年度：24%（42 名中 10 名）
R2 年度：63%（35 名中 22 名）
R3 年度：55%（55 名中 30 名）
R4 年度：58%（38 名中 22 名）
※ R2 年より看取り加算算定開始。それ以前は嘱託医・配置医による死亡確認を集計したもの。
R2 ～ 4 年度の看取り率（年平均）：59%
R4 年度 医師との看取りカンファレンスから死亡までの日数を期間別に集計すると「2 週間以内」が最も多い結果となった。この結果はお食事を食べられなくなった方の状態変化が早いことと、本人・家族と一緒にギリギリまで悩みながら施設でお看取りの選択を支えていった結果であると考える。

○ 看取り事例による成果報告

今後の課題

・施設での看取りケアが当たり前となるために
・人生会議ならぬ人生談義を
・より地域にひらかれた特養へ

1-11	演題	コロナ陽性者が発生
	副題	～その時施設看護師として～

		法人名	社会福祉法人 たちばな会
		施設名	特別養護老人ホーム　天王森の郷

発表者名（職種）	菅野　千春 看護師等
共同発表者	向井　末子
共同発表者	土渕　幸子
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市泉区和泉町 733
TEL	045-804-3311
FAX	045-804-5005
メールアドレス	tennomorinosato@tachibanakai.or.jp
URL	http://tenmori733.jp

今回の発表施設またはサービスの概要	当施設は、横浜市と藤沢市の境に位置し、緑豊かな自然に囲まれた環境にある従来型特別養護老人ホームです。定員 150 名 (本入所 143 名、短期入所 7 名)。地域密着型通所介護・居宅支援事業所を併設しています。

研究の目的、PR ポイント

コロナのクラスターが発生し、通常と異なるケア対応が余儀なくされた。
感染対策を行いながら利用者に合わせたケアとは何か、迅速な終息に向けた取り組みとは何か、振り返りを通し、更なる対応策を講じ検討し、今後に活かしていく。

取り組んだ課題

認知症専門棟でコロナが発生。隔離生活を送る事で行動が極端に制限されてしまう為、体力、食欲の低下、ＡＤＬの低下に加え、認知機能低下の進行などの問題点に対し、振り返りを通し施設看護師として感染対策を行いながら利用者に合わせた対応ケアとは何かを考える。

具体的な取り組み

①令和３年７月
　陽性者：利用者６名（入院６名）職員１名
　濃厚接触者：利用者 14 名、職員１名
　陽性者発生から終息まで 35 日間
②令和４年４月
　陽性者：利用者５名（入院４名　施設療養１名）
　　職員１名
　濃厚接触者：利用者 10 名
　陽性者発生から終息まで 18 日間
③令和４年８月
　陽性者：利用者９名（入院３名　施設療養６名）
　　職員７名
　濃厚接触者：利用者 13 名
　陽性発生から終息まで 17 日間
クラスター終息後に振り返りを行い、各フロアで各課が参加し、ゾーニングのシュミレーションを実施。

活動の成果と評価

クラスター感染対策を繰り返すことで、対応にも少しづつ進歩がみられた。
始めは全てが未経験でシュミレーションを行っていたが細かい部分での問題が生じた。
例えばゾーニングはどこまでか、隔離と準隔離の区別はどうするか、食事の運搬方法や物品の補充方法はどうするか、誰が行うか等。
実際に訓練では確認できなかった問題点がみえた。
それらの問題をクラスター発生後振り返り、対応を一つ一つ繰り返すうちに問題を解決し、次につなげる事が出来た。
又隔離解除後、できるだけ元の生活に戻れるようエリア内での生活援助を工夫した結果、施設療養されたほとんどの利用者のＡＤＬに大きな変化はみられなかった。

今後の課題

- 定期的な職員への感染対策の教育、シュミレーションの実施
- クラスターを想定しサービスが最小限で継続できる取り組みを考え、ケアの見直しを行う
- 常に安価で使いやすい物品の確保
- 迅速な初期対応の方法
- 情報が正しく迅速に伝わる方法
- 多職種連携のあり方
- 職員の精神的フォロー体制

1-12	演題	在宅での看取りケアの質の向上
	副題	～多職種デスカンファによる効果の検討～

在宅看取り		法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
多職種連携		施設名	わかたけ訪問看護ステーション

発表者名（職種）	村松　あい子 看護師等	都道府県	神奈川県
共同発表者	大谷　茂	住所	横浜市神奈川区平川町２丁目４番地２F
共同発表者		TEL	045-548-9296
共同発表者		FAX	045-488-5330
共同発表者		メールアドレス	wakahoukan012@gmail.com
共同発表者		URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	わかたけ訪問看護ステーションは 2021 年 12 月 1 日に開設。横浜市神奈川区を拠点としています。在籍は、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が所属しています。高齢者、精神、小児、終末期と幅広く対応しているステーションです。

研究の目的、PR ポイント

看護現場では、逝去された患者様にそれぞれの看護師が抱く想いや支援方法について検討するデスカンファレンス（以下、デスカンファ）を実施している。看護現場でのデスカンファの目的は、悲しみや後悔を共有し次の出会いに向かうための心の整理やバーンアウトなど精神的負担のケアであるとされている。在宅でも例外ではなく、看護師や関わった多職種がそれぞれの想いを抱いていると想定される。
当研究は、看護師だけでなく、ケアマネジャーやヘルパーにも参加していただくことで、デスカンファの効果が得られるのかを研究した。

取り組んだ課題

ご利用者様が逝去されたあと、担当看護師を中心にデスカンファを実施した。その際に担当ケアマネジャーやヘルパーを招待し、現地もしくは Zoom で参加していただいた。デスカンファ実施後に参加者に対してアンケート協力していただいた。
その結果から看護職以外の多職種にデスカンファが有効か評価した。

具体的な取り組み

デスカンファ自体に不馴れ、初めての参加といったスタッフや多職種のため冒頭５分程度で簡単にデスカンファの目的・ルールをスライドを用いて説明した。アンケートでは、普段の関わりの中で「もやもや」することがあったか・その場合にはどのように気持ちの整理をしていたかなどデスカンファ実施前後で評価できるように質問した。アンケート内でインタビュー可と答えてくださった方に詳しく感想や効果について伺った。

活動の成果と評価

先行研究でのデスカンファ実施後の反応と期待できる効果は、看護師と同様に多職種でも得られる。在宅では、より生活に身近なヘルパーや想いを汲み取るケアマネジャーがご利用者様やご家族様から注ぎ込まれた感情を受け止める場面がある。
日常的に想いを受け止めることで、傷つくのは当然である。自宅で生活するご利用者様を支えるチームとして想いを表出する場が必要である。
しかし、病院内での医師と看護師の立場の差ができるように、在宅でも同じ立場で行うべきである看護師が上になるような構図ができやすい。看護師の立場が上になる状況では意見が言いにくく、もやもやの解消を阻害する要因になる。デスカンファを主催する側が発言しやすい環境作りに努める必要がある。
デスカンファでは後悔などマイナスの振り返り意見が出やすいため、次の関わりにつながる前向きな成果として繋げることができるように、プラスのフィードバックが出るような現場作りが必要である。
このような機会で多職同士がお互いを励まし合い、理解し合うことで今後相談しやすい関係性作りに繋がる。

今後の課題

今後継続してカンファレンスを開催し、より効果的で前向きな会になるよう改善を続けていく。今回の回答をもとに、アンケートを一部見直し、内容を充実させる。
アンケート結果からデスカンファレンス参加に対して“忙しい”といった意見があったため、忙しい中でも継続できる方法を模索する。“なにを話したらいいかわからない”といった参加者の気持ちの評価を行う。

参考資料など

公立学校共済組合東北中央病院　山形大学医学部看護学科
デスカンファレンス導入による看取りに関する意識の変化
松江市立病院医学雑誌第 16 巻第 1 号：25 － 30, 2012
デスカンファレンスに対する緩和ケア病棟看護師の認識
明日の看護に生かすデスカンファレンス
第１回 デスカンファレンスとは何か―意義と実際